



このコーナーでは毎年、文学部の先生方をお願いして、今専門にしている学問との思い出などを語っていただいています。『PROSPECTUS』のバックナンバーでは、また別の先生方のエッセイを読むことができます。文学部ホームページにも掲載されていますので、興味のある人は <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/teacher/essay.html> を参照してください。参考までに、最近5年間に掲載されたエッセイを下に記しておきます。タイトルだけみても、文学部の先生方の学問との出会い方、つきあい方が実に多種多様であることが感じられるのではないのでしょうか。

2022年	菊地 達也 (イスラム学)	せっかくだし
	井島 正博 (国語学)	認識の仕組みを求めて
	小林 真理 (文化資源学)	自分の直感を信じる。
	芳賀 京子 (次世代人文開発センター)	女の一生と人生の岐路
2021年	納富 信留 (哲学)	不東—日本を出るという決断—
	梶原三恵子 (インド語インド文学)	学生時代のいくつかの選択の記
	塚本 昌則 (フランス語フランス文学)	フランス語を学ぶことで新たな自分と出会う
	出口 剛司 (社会学)	敵前を、大事なものを抱えてきわどくすり抜けていくやり方
2020年	陳 捷 (中国思想文化学)	私の選択
	三枝 暁子 (日本史学)	与えられた道を生きる
	齋藤 希史 (中国語中国文学)	断片
	福井 玲 (韓国朝鮮文化)	韓国語史研究にたどりつくまで
2019年	三浦 俊彦 (美学芸術学)	可能世界、美的観点、人間原理……
	大宮勘一郎 (ドイツ語ドイツ文学)	隙間から隙間へ
	村本由紀子 (社会心理学)	始まりとしての「選択」
	熊木 俊朗 (北海文化研究常呂実習施設)	遅れてきた臆病者の懺悔
2018年	鈴木 泉 (哲学)	「自分なくし」の旅
	橋場 弦 (西洋史学)	学問とのめぐり会い
	鉄野 昌弘 (国文学)	選択の余地無し
	今水 寛 (心理学)	心の仕組み

# 圧倒的な現実にもコトバを与える

西村 明（宗教学宗教学史学）

自分が文学部に進学して人文学、とりわけ宗教学をライフワークに選んだのはなぜだったのだろうか。2006 年末に博論をベースに出版した単著（『戦後日本と戦争死者慰霊-シズメとフルイのダイナミズム』有志舎）の「あとがき」でも少々触れてはいるが、ちょうど大学入学から 30 年が過ぎた 2023 年春のこのタイミングで、このコーナーに書く機会をいただいたので、より広角的に振り返ってみたい。

現在、取り組んでいる慰霊研究に直接つながるようなきっかけは、やはり高校時代に経験した雲仙・普賢岳の噴火災害だろう。「島原大変、肥後迷惑」という言葉で知られた寛政 4 (1792) 年の大噴火以来 198 年ぶりとなった平成の噴火は、1990 年、私の高校 2 年の秋に始まった。体調不良で灰色がかっていた高校生活に追い打ちをかけるように、文字通り灰まみれの日々となる。

雨のたびに土石流が流れ、翌年 6 月 3 日には 43 名の犠牲者を出した火砕流災害も起こった。私の実家は直接の被災地域ではなかったが、母校の島原高校からは、山頂の溶岩ドームから流れ下る火砕流の様子が毎日のように見られ、通学中の「汽車」も巻き込まれるのではないかという恐怖を幾度か味わった。ちなみに、火砕流は写真では灰のかたまりにしか見えないが、700℃の熱風が時速 100km 以上で迫ってくる。まもなく鉄道も寸断され、高校 3 年の 1 学期は授業も未消化のまま終業、急きょ 6 月下旬に夏休みに突入した。

途方に暮れたのは、授業や受験のことばかりではない。「災害派遣」というプレートを掲げた自衛隊の装甲車が街に入って島原城に駐屯し、被災地区の人たちは体育館での避難生活を送っていた。結果的には 5 年間続くことになる噴火活動は、もちろんこの初期の段階では収束の気配がまったくうかがえず、将来の見通しについても、灰まみれの視界のように、まさに「先が見えない」状況の只中に投げ込まれた。こうした圧倒的な現実を目

の前にして、とにかくいまここで何が起きているのかを理解し、アタマを整理したいという気持ちに駆られた。その頃から、そうした作業にふさわしいコトバを与えてくれる思想や哲学の本を意識的に読み始めたように思う。

実を言うと、それ以前に思想系の文章になじみがなかったわけではない。小学生時分は昼休みに図書室の事典を開いて、仏像の写真を眺めるのを日課とする風変わりな子供だった。しかし、本人的には両親が営む飲食店で夜な夜な酔客の、必ずしも上手くないカラオケの声を聞きながら眠る喧騒の日々に、心の落ち着きをもたらす実践だった。寺の総代だった祖父の本棚に並ぶ仏教の入門書をパラパラめくりだしたのは、小学6年からだっただろうか。いずれにせよ噴火前から仏教には興味を持っていたが、それはどちらかと言えば、現実から退却（リトリート）するためのものだった。

他方、噴火後の人文学への関心は、むしろ我が身にまわりつく筆舌に尽くしがたさに対して、それでもあえて積極的にコトバを与えたいという「前のめり」な性格をもっていた。抽象度の高い議論への関心も、大所高所から「いまここ」にある非常事態が照射されればという願望に根ざしていた。噴火前から当時の時流に乗って国際機関で働きたいという思いもあったが、一年間の浪人生活を経て、思想研究とフィールド調査を学ぶ方へと足は向かっていった。

とは言え、入った科類は文Iだった。それは、法学分野への関心のためということではまったくなく、「どこの学部・学科に行けば自分がやりたいことができるのか」ということについての情報をまったくと言っていいほど持ち合わせていなかったためである。オンラインでさまざまな情報を収集できる現在とは異なり、当時の地方在住の高校生にとって主な情報源は受験雑誌程度であり、進路決定に必要な判断材料が決定的に不足していた。東大は入学時に専門分野を決める必要がなく、また文系科類の中では文Iがもっとも進路選択の幅がありそうだとすることを、限られた事前情報として仕入れていたのである。そこで、大学入学後は読書会などに顔を出しながら、進学先を探した。

いくつかの選択肢があったが、結果的には宗教学研究室を選んだ。当時関心のあった、哲学や思想、社会学や人類学・民俗学などの分野をバランスよく学べそうということが一つ、もう一つは自分のような人間にも居場所がありそうだったということだった。進学ガイダンスで説明された「宗教

に関係することなら何をやってもいい」というのは、宗教学のルーズさを表し評価が分かれるところかもしれないが、むしろ特定の教義に立脚せず宗教以外も含めた諸宗教に対して価値中立的に向き合うこの分野の姿勢からもたらされた懐の深さとして、個人的には積極的に評価したい部分である。ここに来なかったならば、果たして今頃私は、どこでどうしていたのだろうか。と、高校時代の混乱した日々を思い返しながら、改めて途方に暮れる。

慰霊とか遺骨収集とか、研究している本人も「さて、これは宗教学なんだろうか?」と思いつつ、おっかなびっくりやってきたところがある。博士論文で長崎原爆慰霊を論じた後は、もう少し軽快なテーマを研究しようかと思わなくもなかった(いずれ、「海と宗教」、「笑いと宗教」については取り組みたいと思っている)。振り返ってみて改めて感じるのは、圧倒的な現実にコトバを与えるような営みはやはり宗教学に親和性があるし、そういう領域に触れていないと、どうも何か物足りなさがつきまとう。今のところ、この選択は間違っていなかったと言える。

## 考古学を選んだこと

根岸 洋（考古学）

私は 2021 年に人文社会系研究科・文学部の考古学研究室に着任した。母校に教員として戻ってきたことになるが、それまでの選択がどんなものであったのかを問われると、人に語るができるほど立派なものではないというのが率直な思いである。大学教員といえば研究のみに邁進してきたイメージを持たれるかもしれないが、少なくとも私の場合はそうではなかった。生来の不器用さのため幾度も挫折してきたし、この道を進むべきか否か自問自答の日々を過ごしてきた。しかし今回、若い学生を対象に自らの経験について語る場をいただいたので、少しでも参考になればと思い、私がしてきた「選択」を紹介することにしたい。

私が漠然と考古学に関心を持ち始めたのは高校生の頃である。直接のきっかけになったのは世界史を担当されていた E 先生であった。先生はかつていくつかの高校で歴史研究部（私の進学時には既に廃部）の顧問として生徒を率い、秋田県内で遺跡を発掘する活動をされていた。先生から考古学の話を知ったのは授業中ではなく、論述問題の指導を受けていた放課後であった。これをきっかけに歴史学や考古学の専攻がある大学に興味を湧き、文科Ⅲ類を受験するという選択をした。これが私の進路における最初の選択である。

運よく東京大学に入学し、そのまま考古学の道に一直線と思いきや、当時の私は、初めて触れる様々な学問分野や課外活動に目移りし、興味関心が二転三転していた。一応、考古学研究会（サークル）に入り、遺跡の発掘調査に参加してはいたものの、もっぱら本の乱読と掛け持ちした別のサークルの活動に夢中になっていき、考古学への思いは次第に頭の片隅に追いやられていった。そんな状態で二年次の進学振り分けを迎え、第一志望はフィールドでの聞き取り調査を主な手法とする文化人類学にしようと思いつく。しかし、当時大変人気のあった文化人類学のゼミに参加しようとするもセレクションに通らず、またはっきり言って真面目な学生ではな

かったため進学が叶わなかった。そんなこんなで進学先は第二志望に選んでいた考古学に決定したのである。

考古学専修では教授陣や大学院生の先輩方に圧倒される毎日が続いた。特に苦戦したのが外国考古学を原著で学ぶ演習である。当時は日本の考古学を教えてくれる演習は少なく、中国語・ロシア語・フランス語などの文献を読んで発表することが求められた。そんな中、毎年8月にある北海道北見市常呂にある実習施設での発掘調査は実に楽しかった。先輩や同級生と合宿生活をしながら進める発掘現場で、一つの調査目的に向かって協力するチームワークの重要さを学んだ。しかし、心のどこかで文化人類学への関心が捨てきれず、さらに当時は就職氷河期真っ只中で将来への葛藤もあり、同級生が一般企業の内定をもらうのを横目に見ながら就活の真似事もしていた。さらに詳細を省くが大きなミスをしてしまい、ストレートに大学院へ進むことができず、周りとはやや違った道を選択することになる。

大学院に進学できなくなった私は、佐藤宏之助教授（現・名誉教授）の勧めで、埼玉県埋蔵文化財調査事業団（埼玉埋文）の期限付調査員となった。一旦大学を離れて社会に出たのである。日本では道路工事などに伴って遺跡が見つかった場合、あらかじめ遺跡を調査記録することが文化財保護法で定められている。そんな仕事を請け負う公的機関が埋蔵文化財の調査機関であり、考古学専攻を出た学生の主要な就職先である。期限付きとはいえ正規の地方公務員と同じ扱いを受ける職であり、学部卒の私を採用していただいた埼玉埋文には感謝してもしきれない。また、幸運なことに自分の研究分野である縄文時代の遺跡の発掘調査を担当することができ、働きながら見識を深めることができた。さらに上司が理解のある方で、翌年の大学院受験に向けた勉強も続けられるよう折を見て励ましていただいた。

しかし、この時点でまだ私は迷っていた。大学院に進学するということは決めていたが、考古学の研究職を目指すという覚悟はできていなかったように思う。実際、埼玉埋文の同期の多くは正規採用調査員を目指していたし、埋蔵文化財の仕事をしなくても研究を続けることは可能だからだ（※注）。それでも大学院に進もうと思ったのは、考古学が自分に向いているのかを確かめたかったのと、一般就職をするという選択肢を残しておきたかったためである。ここにきて考古学以外の道に進むのかと疑問に思う向きもあるかもしれない。しかし実際、修士課程修了後に一般企業を選んだ先輩や同級生もいたので、自分としては選択の余地を残すことが必要で

あった。このとき 22 歳。つまるところモラトリアム期であった。

ひとまず予定通り大学院修士課程に進学したのだが、2 年間で博士に進学するための研究の方向性を定めることができないでいた。その結果、修士論文は不合格となり、自分は考古学に向いていなかったのかとかなり落ち込んだ。修士課程 3 年目を休学し、また発掘調査関連ではあるが嘱託職員として採用してもらい、数ヶ月間研究から完全に離れる生活を送った。このとき一般就職への方向転換も検討していたのだが、同じように進路に悩む職場の同僚から励まされ、博士課程への進学に再挑戦するという選択をしたのである。

2 回目の修士論文は無事に合格となり、博士課程に進んだ。博士課程では自ら獲得した研究費を使って海外の民族調査を始め、もともと関心のあった人類学的研究へと方向転換することにした。自分にとってはそのとき興味関心のある研究に取り組むことが最優先で、学位取得後のことは深く考えていなかった。そんなとき研究室の先生方から、「将来どんな道に進むのか、そのために今何をすべきかよく考えるように」との助言をいただいた。この言葉で初めて自覚したのが、自分の目指すべき研究の核となるものが、日本列島の先史考古学にあることであった。その結果、博士課程三年目にして学位論文を白紙に戻し、修士課程まで研究していた日本考古学をテーマに据えなおした。その一方で、いつか日本と世界の人類史を比較するような研究がしたいという思いを抱くようになった。これが今の自分の研究テーマに繋がっている。

その後は博士課程を満期退学し、青森県で文化財保護行政の専門職に就いた。この職を選んだのは埼玉文での経験が大きい。初年度に役所で働きながら学位論文を完成させるのは苦しかったが、なんとか書き上げたことでようやく考古学の研究職を目指すという覚悟ができたように思う。この覚悟に至ったのが 31 歳の時だから、なんと悠長で優柔不断なことかと思う方もいるだろう。もっとも 22 歳の時から修士の 2 年間を除き、何らかの給与を得ていたため、働きながら悩み続けることができた。研究職を目指す方の多くはもっと早くに決断するのもかもしれないが、少なくとも私には悩む時間が必要であったし、当然暮らしていけるだけの収入も必要だった。そのような私を許容してくれた考古学という分野が、なんと懐の深いことかと嘆息するばかりである。

いま自分が教える立場になってみると、学部三年生まで専門分野を選ぶ

ことができない東大生が、その後の進路に悩むのは当然だろうし、決して恥ずべきことではないと強く思う。また研究分野にもよるだろうが、一度大学から離れたとしても、また学び直すという選択肢もあって良いはずである。迷走を繰り返しながら今に至った私のこの駄文が、ほんの少しでも学生諸君の参考になれば望外の喜びである。

※都道府県をはじめとする自治体では、埋蔵文化財の調査・保護に係わる専門職の採用があるが、これらはいくまで行政職であって研究を業務にすることはできない。しかし遺跡の発掘調査や学芸業務に携わることはできるため、行政機関で働きながら研究を続けていく人が多い。このような職種は少なくとも人文系には珍しく、考古学分野ならではの特質といえるかもしれない。

## 読めば読むほど

佐藤 至子（国文学）

私は近世（江戸時代）の文学を研究している。主な研究対象の一つは十九世紀に江戸で出版された合巻（ごうかん）と呼ばれる小説である。合巻は、ほぼ全ての紙面に挿絵があり、紙面上に挿絵と文章が混在する形態を持つ。読み切りの短編から何年にもわたって続いた長編まで、さまざまな作品があるが、最も著名なのは天保の改革の際に絶版処分となった『修紫田舎源氏』（柳亭種彦作・歌川国貞画）であろう。

近世文学に関心を持ち、合巻を研究するようになったきっかけを思い返してみると、自分のなかにあった小説や歌舞伎への興味がそこにつながったということは確かだが、大学の授業や身近な人の助言に導かれるところも大きかったように思われる。

もともと運動よりも読書が好きで、小学生の頃はナルニア国物語のような外国の児童文学をよく読んでいた。中学生の時は向田邦子の作品を愛読していたが、まわりに向田邦子について語り合える友人はいなかった。歌舞伎を観るようになったのは高校生からである。初めて観たのは三代目市川猿之助（現・二代目市川猿翁）のスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」で、女方の美しさや宙乗りの演出に驚き、すっかり魅了されてしまった。以来、しばしば歌舞伎座に出かけて観劇するようになり、三階席から双眼鏡で舞台を見つめていた。芝居の内容はすぐには理解できない場合もあったが、とにかく役者も舞台も美しくて飽きなかった。受験勉強の合間に「助六」や「白浪五人男」の名ゼリフを暗記したりもしていた。

大学では国文学を勉強しようと比較的早くから決めていた。お茶の水女子大学に入学し、一年生の時の授業で黄表紙について学んだ。黄表紙は十八世紀の後半に流行した絵入りの滑稽な読み物で、合巻の前身にあたるジャンルである。大学生協の書店に行くと、社会思想社から出版された黄表紙の画期的なアンソロジー『江戸の戯作絵本』（全六冊、現代教養文庫）があり、さっそく購入して読んだ。荒唐無稽な設定のものや江戸の人々の

日常が垣間見えるようなもの、作者が作中に登場するものもあり、平安時代や中世の古典とはまったく違うおもしろさを感じた。

研究することへの漠然とした憧れがあったので、三年生の時には大学院への進学について考えていた。中世文学、近世文学、国語学の演習科目を受講し、卒業論文では柳亭種彦の合巻と読本を取り上げた。合巻を中心に研究したいと思ったのは、いくつかの理由があった。まず、合巻の挿絵がおもしろく、小説における挿絵の役割に興味を持ったこと。また、合巻は複雑な筋立てを持つ作品が多く、それを読み解くのがおもしろそうだったこと。そして、身近な人から「いま盛んに研究されているものではなく、あまり研究されていないものに取り組むほうが良い」と助言されたことである。

卒論を書くために資料を集め始めると、とくに合巻については適切な翻刻書が少ないことに気づいた。当時（一九九〇年代）、図書館などで閲覧できる合巻の翻刻書のほとんどは戦前に出版された古いもので、たいいていの場合、挿絵は省略されていた。しかし、挿絵を見なければ研究にならない。そこで原本のコピーを手に入れるべく、国立国会図書館や国文学研究資料館、東京都立中央図書館に通った。卒論で取り上げる作品についてはそれで何とかなったものの、合巻というジャンルの全体像をとらえるには、もっと多くの作品を読まなければならない。勉強を続けるなら、合巻の原本を多く所蔵している大学の大学院に進みたいと考えるようになった。

東大の大学院に入学した後は、総合図書館にある合巻をひたすら読んだ。当時の総合図書館は、一階の大階段の近くに書庫への入り口があった。書庫の奥まったところに合巻の原本が保管されている部屋があり、そこに入る時は何ともいえない気分になったものである。その部屋には合巻以外の近世の小説類もあり、合巻を読むのに疲れると、人情本を借りて一階の閲覧室で読んだ。

総合図書館で手に取った合巻の中には、手擦れで紙面の一部が黒ずんでいたり、紙がめくれて元に戻らなくなったりしているものも見受けられた。その部分の文字が読み取れず、困ったこともあったが、その本を読んだ人々の列に自分が連なっているということも確かに感じられた。自分は研究者である前にひとりの読者であるという感覚が私のなかには根強くあるのだが、それは比較的早い時期から原本にふれてきたためかもしれない。

原本にふれると言えば、近世の版本や写本を扱っている古書店や古書即

売会に行き始めたのも学生の頃である。合巻の原本を初めて買ったのは学部  
の四年生の時だったと思う。学生でも買える値段であった。

合巻に限らず、古書との出会いは運に左右される部分が多い。たとえば古書店から送られてくる目録を見て注文しても、出遅れたり、抽選に外れたりして手に入らないことがある。その本を買おうと選択しているのは自分だけども、必ずしも自分が購入者になれるとは限らないのである。

研究も、はじめに考えた通りに進むことは少ない。私の場合、調べて行くうちに思いもかけないことがわかったり、先達からの助言や教示（論文などを通じての教示も含む）に導かれたりして、予想もしなかった方向へ進んで行くことの方が多かった。だから、「人には添うてみよ、馬には乗ってみよ」ということわざを模倣して言えば、「書かれたものは読んでみよ、出会った人とは話してみよ」である。読めば読むほど、誰かと話せば話すほど、新しい景色が見えてくるはずで、そこに研究のおもしろさがあるのだと思う。

# 日伊間の博士号ダブルディグリーの 仕組みを創設する

土肥 秀行（南欧文学）

研究者としての自分のこれまでについて、大学院進学を考えている学部生のみなさん、そして研究を続けるかどうか迷っている博士課程を終える前、あるいは終えたが常勤のない方々を想定しつつ書いていきます。予めお詫びしなければならないのは、思い出話調であること、さらに東大での経験について書く際には内むきであることです。ご容赦願います。そしてこれから書くことが励ましになるのか、「お前はいいよな」との感想をもたれて終わってしまうのか、正直わかりません。さらには、僕が研究者志望の人に対して常に言っていること、とにかく粘れるだけ粘って続けてほしい、そうした人だけが最終的にポストに就いている、とのメッセージですら励ましなのかなんなのか。これは、「ではいったいどうやって？」とツッコまれても返す言葉のない精神論でしかありません。以下もその程度のものでしょう。

僕が辿ってきた道筋は、おおよそ次のとおりです。中学時代にイタリアへの関心～学部のうちはやっとやっとの伊語学習～修士でようやく伊文学へ～博士号ねらいでポローニャ大に留学～フィレンツェの東大センターで助手～帰国して学振 PD、浜松の公立大学に就職し 5 年勤務、さらに西へ、京都の私立大学で 8 年勤務（この間、育英の奨学金返済免除となる年数に到達）、そして現在。まだ道半ばで、決して「あがり」ではありません。以下は、まだ迷い多き者の言葉です。

イタリア文学を専門にしていると、「なぜイタリアなのか」としばしばたずねられます。14 歳のとき、竹山博英氏（のちに偶然、立命館大学で氏の後任となった）のマフィアルポ（そして映画『ゴッドファーザー』）に感化され、翻訳されたイタリア文学作品を読みつつ（最も印象に残っているのは米川良夫訳のピランデッロ『生きていたパスカル』）、いずれ言語を学ば

うとぼんやり考えはじめました。それが世間ではどちらかというマイナーに分類される選択との自覚はありません。そう気付いたのは、大学入学直前に、東大の必修第二外国語にイタリア語がないのを知ったときでした（現在は第二外国語に含まれています）。よって現実的な選択となり、パスカル研究の支倉崇晴先生とパトリック・ドゥヴォス氏が担当のフランス語クラスに入りました（となりは蓮實重彦先生クラス）。第三外国語で伊語を選択したものの、ちゃきちゃきした西本晃二先生に魅せられつつも（あれで江戸っ子ではないのはおどろき）、単位を取るまではいかず、3年生になってからようやく本気で語学に取り組みました。進振時、当時すでにイタリア語イタリア文学から名称変更していた南欧語南欧文学はマイナーゆえに選ばず、なにをやってもいいと言われていた美学藝術学にしました（実際はそうではなく、だいぶドイツの哲学を学ばされました）。その方が同級生もいて楽しそうだったからです（南欧はいまでも駒場からあがってくるのは年にゼロか1）。いまでも当時の仲間に、交流はなくとも友人と思える人がいます。

就職活動はせずに、予定通り、修士からは南欧へ。時代はバブル崩壊直後でも、同級生はいわゆる優良企業に就職していきました（何人かは、僕のように、美学ではない専門の院へ）。修士をコンパクトに2年で終わらせたのは、博士に進んでイタリアへ渡る計画を立てていたからです。学部の3年生以降、夏や春の長期休暇ごとに、イタリアで最低一ヶ月は過ごし、長期の留学生活への思いを募らせていました。博士進学後、半期でボローニャ大学へ。運よく前年に、ロータリー財団奨学金（2年分）の補欠合格の内定をもらっていましたが、当時も今もあまり例がありませんが、どうせ行くのなら学位（博士号）ねらいと意気込みだけはありました。制限時間6時間の論述試験を受け、なんとか博士課程に入れたものの、そのあとがたいへんで、規定の4年をはみだし5年かけて終えることになりました（イタリアの博士課程在籍者は、基本的に奨学金が支払われセミプロのような身分なので規定の期間で終わらせるのが普通。外国人の僕はなにもらっていませんでしたが）。ここまで研究の内容に触れずにおりましたが、学部の卒業論文から一貫して、映画監督として有名なパゾリーニの文学を扱いました。

ボローニャ大学イタリア文学科の博士課程に在籍しつつ、開設されたばかりの東京大学フィレンツェ研究教育センター（1998年から2004年まで）

常駐の助手に採用され、フィレンツェに引っ越しました。このポストに 5 年勤められたので、イタリアにも居続けられ、博士論文を完成させることができました。

博士号を取得し、助手の契約期間も終わり（センター閉鎖と同時）、帰国して非常勤講師と博物館バイトを東大駒場で開始、学振 PD 採用につなげ、PD 二年目に浜松にある県立の静岡文化芸術大学に就職。イタリア語やイタリア文化の教員を 5 年務め、京都の立命館大学文学部へ。立命館 4 年目には、ローマ大学サピエンツァで研究員として 1 年を過ごすことができました（僕にとっては第二の留学）。出身大学に戻り二年目に入る時点でこの原稿を書いています。

ここまで読まれた方は退屈されたのではないのでしょうか。特に決断と呼べるものも経ず、むしろ流れでやってきました（大学卒業から 30 年近く経過したのが驚きなのはそのせいかな）。人生の方向性は、自分で選択するというより、状況によって決められてきました。与えられた機会を活かしてなんとかやってこられた気がします。

東大では自分の研究だけでなく、後進の育成に力を入れていきます。イタリア文学プロパーを養成する機関は、日本には京大そして東大にしかありません。研究者としての自分が、南欧語南欧文学研究室がなければ存在しえなかったのですから、これからの人に対して、研究室の存続とさらなる発展を約束しなければなりません。そのために、僕は得られませんが、東大とイタリアの大学とのダブルディグリーとしての博士号が可能となるような共同学位の仕組みが不可欠と考えています。具体的な事例と制度作りにこれからチャレンジしていきます。